

「乳癌」

平成 25 年 9 月放送

横井 繁周

乳がんの罹患率は、30 歳代後半から徐々に増加し始め、50 歳前後にピークを迎えます。近年、女性がかかりやすい癌で第 1 位となっています。多くの乳癌の発生、増殖には女性ホルモンが重要な働きをしており、「出産歴がない」、「授乳歴がない」、「閉経後の肥満」などがリスク要因となります。また、「喫煙」や「アルコール」といった環境因子、「家族に乳癌に罹患した方がいる」ことも要因の一つです。「定期的な運動」は逆に発症リスクを抑えることができます。

最近 Angelina Jolie(アンジェリーナジョリー)さんで話題になった遺伝性乳癌は、全乳癌の 5~10%にあると言われていています。遺伝子検査は全ての医療機関でできるわけではなく、また現時点では保険適応でないため費用が高額になります。遺伝性乳癌と診断された際、抗エストロゲン薬、予防的乳房切除や卵管卵巣切除などが癌の発生率を下げると言われていますが、日本ではまだ適応に関して議論中で、ほとんど行われていません。

癌は病気が進行するにつれ、周囲への臓器への浸潤、また肺や骨、肝臓、脳など遠くの臓器へ転移します。その場合、治癒が難しくなりますが、早期発見、早期治療で予後をよくすることができます。早期発見の可能性を高くする方法としては、自己検診と乳がん検診があります。自己検診で乳房のしこり、左右差、皮膚変化を認める場合や乳房痛、乳頭からの分泌物など自覚症状を認めた場合は、医療機関を受診し、検査を受けることをお勧めします。乳がん検診では医師による視触診、乳房撮影（マンモグラフィ）の 2 つが施行され、乳癌の可能性がある場合は、医療機関へ紹介されます。医療機関では乳腺の専門医に

よって精査が進められ、その上で癌が疑われる病変が指摘された場合は、超音波、CTやMRIなどの追加検査、針生検や細胞診など病理診断による確定診断を施行します。

乳癌が発見され、遠隔転移がなく、病巣が比較的小さい場合は手術が選択されます。手術後の再発予防には放射線治療や次に述べる薬物療法が行われます。乳癌の性格で、ホルモン受容体が陽性の場合はホルモン療法、HER2^{ハーツ}蛋白などの発現を認める場合は、分子標的薬といわれる薬剤を使用できます。リンパ節転移や遠隔転移により進行度が高い場合は、抗癌剤と呼ばれる化学療法が適応になります。乳癌ではたくさんの抗癌剤が適応になっており、その組み合わせやホルモン療法、分子標的薬との組み合わせによって、高い効果を得ることができます。



治療法の改善により、乳癌による生命予後は飛躍的に延長してきていますが、乳癌による総死亡数は未だに増加傾向にあります。罹患率が高くなっていることも要因の一つですが、早期発見できていないというのが大きな要因です。早期発見、早期治療によって、乳房の温存の可能性、良好な生命予後や完治が期待できます。そのためにも、月1回の自己検診と2年に1回の乳がん検診を受けましょう。